

「すべての命守りたい」

家族失った学生ら誓う

仙台市で開かれている国連防災世界会議の関連フォーラムで15日、東日本大震災で家族を失うなどした若者たちが自らの経験を語り、防災の重要性を訴えた。「家族を失った私たちがだからこぞできることがある」。そんな決意でつらい思い出と向き合う若者の話に、会場の参加者たちは真剣に耳を傾けた。

仙台市で開かれている国連防災世界会議の関連フォーラムで15日、東日本大震災で家族を失うなどした若者たちが自らの経験を語り、防災の重要性を訴えた。「家族を失った私たちがだからこぞできることがある」。そんな決意でつらい思い出と向き合う若者の話に、会場の参加者たちは真剣に耳を傾けた。

△本文記事2面▽

防災会議

筑波大3年の菊地将大さん(21)は岩手県陸前高田市出身。震災による津波で両親を失い、祖母と姉の3人家族になった悲しみを抑えるように、静かに語った。

震災から4年以上がたった今も、「家の中の不自然な静けさを受け入れられない」という。「親をうっとうしく感じていたあの頃が懐かしい」とも時々思う。

両親を失い、「前に進みたいとの漠然とした思いはあったが、高校生だった自分にはどうすることもできなかった」と振り返る。

月後。一晩中、部屋にこもって涙を流したという藤井さんも、菊地さんらと共に

フィリピンを訪れた。暴風でつぶれた家、高波で打ち上げられた船……。その光景は、震災直後の大槌町に似ていた。食料も十分に届かない現地の被災者の実情に触れ、「大切な家族を災害で亡くした私こそが防災を学び、伝えないといけない」と決意した。

2人の話を聞いたフィリピン出身で東北大大学院に留学中のジョナ・ガムタンさん(25)は「震災で家族を失った多くの人の悲しみを改めて実感した。被災経験を共有して防災を考えようという2人の提案は、必ず将来、役立つと思う」と話した。

転機は昨夏、教育支援団体主催の防災に関するプロジェクトでフィリピン中部を訪問したこと。2013年11月の巨大台風で、いまだ大きな爪痕が残る現地の惨状を見た。「二度と悲劇を繰り返したくない」との思いが、東北を越えて世界に向かった。すべての命を守りたい。防災に力を尽くしたいと、今、希望を抱く。やはり津波で祖父を亡くした盛岡市出身の早稲田大1年藤井理子さん(20)は、アジアの若者が被災地に集って被災体験と防災について話しあう「アジア学生防災会議」の開催を提案した。岩手県大槌町の祖父の死が確認されたのは震災5か